

山 里 孫 存*

聞き手 佐 幸 信 介

——私たちの新聞学研究所では、「テレビ60年」を地方民放から捉える作業を行っています。沖縄テレビは、本土復帰の72年よりも10年以上前に開局しています。NHKよりも前に民放が開局しているのは、キー局も含めて日本では唯一沖縄だけです。このことはいうまでもなく、日本と沖縄、そしてアメリカとの戦後の政治的な関係の中で生じているわけですが、その意味でも今回は放送の現場のひとつの現代史としてお聞きしたいと考えておりました。さっそくですが、まず、開局当時のことについてお聞かせください。

沖縄テレビの開局までとその後

山里 開局当初は、僕は入社していなかったのですが、その点については先輩から聞いている話がベースになります。入社後の展開については、ずっと報道制作現場にいましたので実感を含めてお話できればと思います。

沖縄地区のテレビ局として、NHKとの関係という点からお話すると、他の局と決定的に違うのは、沖縄地区においてNHKは後発局であるということです。電波そのものに関して言えば、上陸した米軍が1945年の5月くらいからは兵士向けに戦場放送局のようなものをやり始め、その後、「AKAR」と呼ばれた米軍のラジオ放送があり、そして琉球放送（RBC）が引き継いでいながら、1956年にラジオの日本語放送局としてスタートさせました。

沖縄テレビ（OTV）は、RBCのラジオ開局の直後からいろいろ準備を始めて、1959年の11月に、沖縄初のテレビ局として開局しました。OTVの開局に至っては、これも世界中でどこを探してもそんなテレビ局はないと思いますが、電波法が、沖縄が果たしてどこに属しているのだ？ということ自体が不安的な状態なので、琉球政府に伺いを立て、さらにアメリカ民政府との協議が始まったというということです。テレビという新しいメディアに対応するルール、当時の法規にはテレビに関する条項はなく、そこに関してどう対応するのかということで、だいぶ時間がかかったという話を聞いています。そのようなすったもんだがあって、ようやく免許が交付されて59年11月にスタートしたという状況です。

その時は、もちろんNHKはありません。余談ですが、沖縄では今もNHKの受信料が日本でいちばん払われていないであろうと思うのです（笑）。なぜなら、沖縄の人にとってテレビは、そもそも無料でしたから。復帰後、NHKが集金に回って、「何言ってるんだ！」という状況が生まれたというのは今でも語り草になっています。

あれから40年もたったので状況は変わりつつありますが、スタートと当初は無料で電波が享受できるというのがスタートライン、NHKが開局したのは、正式には復帰の年の1972年です。た

*やまざと まごあり 沖縄テレビ報道制作局次長

だし、その準備段階で、沖縄放送協会 OHK と呼ばれる準備局というか前身があって、その放送開始が1968年の暮れです。

OHK がスタートするまでの時期は、沖縄テレビは、限られた時間だけの短い放送時間をカバーしながら、徐々に放送を増やしていたようです。当初、沖縄は日本ではありませんから、キー局のどこかの系列でもなく、ソフトが不足していました。一方で、NHK は将来的に沖縄にいつかは進出するというのもあって、未開拓の土地である沖縄地区で番組を流したいという NHK 側の思いがありました。この NHK の思惑と沖縄テレビのソフトが欲しいというところがマッチして、当初から NHK の番組をフィルムで空輸して、番販として買って放送するような状態があったようです。今では信じられませんが、NHK の紅白歌合戦が正月番組として、スポンサーの CM 入りで流れていたという時代もあったと聞いております。当時は派手にスポンサー入りで「紅白」を放送していたようです（笑）。

その時代には、日本ではなかったがためにいろいろなところのお付き合いができたりましたが、その反面、苦労もあったと聞きます。番販とかスポンサー獲得などの拠点にするべく東京支社を作ろうとしたら、外資系あつかいでスタートラインから難しかったようです。そこはフジテレビが合弁会社のような形をとって東京支社をスタートさせたと先輩から聞きました。とにかく、まだ日本ではなかったことで、いろいろなことが起きていたという感じです。

NHK との関係については、準備段階の社員研修もかなりお世話になったようです。スタート前の実地教育や、現場でいろいろ経験を積む段階は、沖縄テレビの新入社員をフジテレビや NHK に派遣して、3、4 カ月鍛えてもらってから放送を開始したという記録が残っております。その後、NHK は本土復帰前 OHK を開局しますが、その際には今度は逆に沖縄テレビから技術者がヘッドハンティングされて何人か抜かれて持っていかれたというような話も聞きました。

OTV の開局後は、当時は番組を空輸で運んでもらって放送している時代がずいぶん長かったですが、5年後、1964年のオリンピックのちょっと前にマイクロがようやく開通し、それからは生で受けられたり、少しの時差で受けてすぐ放送できたりという状況になりました。その時代も OHK がスタートするまでの4年間くらいは、逆に NHK の番組が沖縄テレビでは増えたらしく、『太閤記』など、NHK の伝説のドラマも沖縄地区では沖縄テレビが放送していました。リアルタイムで番組を沖縄で受けて、隙間で何とか CM を入れたりする時代であったようです。

社内の先輩が書いていた文章によると、当時、NHK の番組をマイクロで受けて、そこに強引に CM を入れられるかと、東京支社の社員が恐る恐る交渉をしに行ったところ、逆に東京の大手広告代理店の人たちが面白がって、「すごいね、NHK の番組にスポンサー入れられるんだ！」と、すごく一生懸命やってくれたということを書き残していました。面白い時代ですね。

私は映像を見ていませんが、沖縄テレビの技術が現場に入って、NHK の番組を協同制作したこともあったそうです。例えば NHK 交響楽団が沖縄に来て、沖縄で収録する時に OTV が一緒に作っていたと聞きます。沖縄では沖縄テレビが放送して、全国向けには NHK で「沖縄テレビ制作協力」というような番組もあったらしいです。

そういうことがあってようやく日本復帰となります。僕は東京オリンピックの年1964年生まれだから、沖縄でのマイクロの導入と同級生なんです。僕が子どもの頃、復帰前の沖縄テレビのコールサインは KSDWTV だったのが、復帰後に JOOFTV になり、チャンネルも 10 から 8 へと変わ

りました。私自身の子どもの頃の記憶でも沖縄テレビは10だったことを覚えています。

NHKとの関係では、日本への復帰前は蜜月のような非常に親密な時代があったのですが、その後、復帰したあとでは関係性は違っていたようです。復帰と同時に開局したNHKは、日本のテレビ局、内地の会社というイメージが大きかったようです。

僕は働き始めて25年ですけど、駆け出しの頃、ある選対事務所に中継入っていた時の話ですが、RBCが先に「当確」を打ち、次にOTVが「当確」を打って、NHKがまだという状態でした。当確候補者のばんざいも済んで、樽酒も割ろうとしているところでしたが、そこにNHKのディレクターが土下座して、「うちまだ当確を出していないので、これだけは何とか残しといてください！」と頼んできました。そうしたら、選対本部長が「地元の局がもう当選確実打ったんだからもういいんだ」と言って、相当もめたこともありました。20年くらい前の段階でも、NHKは相当「よそ者視」されていたと思います。よそ者というか、沖縄では「ナイチャー（内地の人）」というのですが、「本土から来て、何言ってるんだ、地元のテレビ局じゃないでしょ」という感じはすごくありました。

——やはり内地からきた局という感じなんですね。

山里 はい。受信料をとって回ったというのも非常に印象悪かったと思います。後から来て、ナイチャーが偉そうにお金集めて回ってというアウェイな風がずいぶんあったと思います。だから、NHKの人たちも相当困ったと思います。

ネットワーク化と独自性

山里 沖縄テレビは、ネットワークで言うとフジ系列です。開局する際には、これも先輩たちが書き残しているものを見て信じられないのですが、開局した11月1日の祝賀パーティに、フジの鹿内さんがみえていて、そこで直談判やいろいろと交渉をして、その日に「系列」の覚え書きを交わしたらしいです。

だから、フジのネットワークに入ることが事前に決まっていたわけではなくて、開局の日に沖縄に来ていた鹿内さんと直談判をして覚え書きを交わす。つまり、将来的には経営参画もするし、フジテレビ系列へ入る覚え書きが作成されたらしいのです。開局するまでは、対日本に対しては特にどうということは明確に決まっておらず、直前まで日本テレビにも話しをしていたらしいです。もちろん事前の根回しはいろいろあったかと思いますが、覚え書き交わしたのは、まさにその開局の日の11月1日だということなので、そこまでは本決まりではなかったようです。

——沖縄テレビを開局した時の出資は琉球新報や地元の企業ですね。

山里 地元の企業で集めたはずですが。しかし、相当難産というか難航したようです。フジテレビとの合弁で、東京支社がきちんとできるのが1960年4月で、開局から半年後くらいです。フジテレビの中では、当時、アジアビジョンというか、アジア展開をするスケールの大きいイメージを持っていたようですが、その中で沖縄を押さえておいたほうが、いろいろとフジテレビとしても夢が描けると考えていたのではないのでしょうか。日テレは沖縄のネット化については二の足を踏んだらしいです。

沖縄は、OTVがフジテレビ系列で、RBCがTBS系列ですから、主にこの二系列、2つのチャンネルという時代が続きました。3局目の話は随分とあったのですが、最終的に1994年（平成7

年) にテレ朝系の QAB が開局し、それから沖縄は 3 局体制になりました。ですから、いまだに日テレの番組は、主に OTV と RBC で視聴率の取れそうなものを番販で奪い合っているという状況です。

沖縄に住んでいる人たちは、系列の意味がいまだによくわからないところがあると思います。東京などでテレビ見ていると、各キー局の色がはっきりしているなかで視聴者も観ていると思うのですが、沖縄の場合は、特に日テレの番組というのがあっち行ったりこっち行ったりしているので、あやふやな感じではないでしょうか。例えば『エンタの神様』という一世を風靡した番組がありました。この番組の全盛期は、レギュラー放送は RBC が放送し、2 時間スペシャルは OTV で放送したりしていました。

——そうした番組の番販売の交渉は、東京の営業の仕事になるのですか。

山里 そうです。OTV の場合では編成と東京の出先との連携になると思います。テレ東の『開運! なんでも鑑定団』も最初がうちの朝 10 時にずっと放送していました。沖縄地区の日曜の朝の時間帯で最も視聴率が高いときには 20 数% 取るような番組だったのですが、東京から、「今、『行列のできる法律相談所』がすごいよ」という話がきて、『鑑定団』と『法律相談所』と入れ替えたのです。そうしたら、手放した途端に RBC が『鑑定団』を買って、同じ時間帯の裏番組として放送し始めました。そういうことがしばしば起きています。

今 RBC では、TBS 系列でありながら、ゴールデン帯で『秘密のケンミン SHOW』などの日テレの番組も放送されています。土曜日や日曜日の午前とか昼間といった、比較的フリーなところで日テレ番組は沖縄地区で放送されていたのですが、2、3 年前からゴールデンタイムにもボン! と入ってくるようになってきたので、余計にネットワーク系列のイメージは錯綜しています。

歴史的にいうと、沖縄テレビがクロス局だったという関係があり、日テレの高校サッカーや高校生クイズなどいわゆる全国中継ものは、今でもいくつか制作に関わっています。歴史的には OTV が、日テレ準キーのような状態があったのですが、今では番販で RBC 側の日テレ率が高くなってさえます。

独自の番組づくりとウチナーグチ

——本土で NHK のテレビの開局が 1953 年です。沖縄テレビは、全国的にみても非常に早い 59 年に開局しています。これは、アメリカとの関係があったのでしょうか。

山里 そうですね。英語の放送ですけど、アメリカの放送がかなり鮮明に見ることができた時代がありました。僕が子どもの頃でも、当然、全部英語ですけど、『セサミストリート』や『宇宙家族ロビンソン』とか『ザ・ルーシーショー』とか、アメフトの中継なんかもしょっちゅう見ました。おそらく OTV が開局する以前にも、アメリカ軍が沖縄に何万人も暮らしているの、そこ向けの放送があってテレビがあり、日常的にはアメリカの文化のようなものが身近にあって、次はテレビを早く開局しようという社会的な機運はあったのではないのでしょうか。

そういう意味では、黎明期というか創成期には系列の縛りの意識もなく、本当に一国一城という、自分たちでテレビ局を運営して、番組を作る、というのが沖縄テレビではスタートでした。僕ら今沖縄テレビにいる人間にも、この時のエネルギーは受け継がれているイメージがあります。

——番組表をみると、『郷土劇場』という名前が目を引くのですが、この番組は長く放送されているものですか。

山里 そうですね。『郷土劇場』は今でもなんとか続けている番組です。『郷土劇場』は民放連から表彰も受けたことがあるのですが、放送枠の移動やちょっと休止をしたことなどがありますが、開局以来継続して55年間放送している、「日本一の長寿番組」と公言している番組です。

開局当初はソフト不足で、日本本土から買ってくる番組も限られていたとき、OTVは沖縄芝居に目をつけました。沖縄には沖縄の言葉「ウチナーグチ」を使ったお芝居をする劇団がいくつもあって、戦前は娯楽の花形でした。その後「映画」に押され、華やかだった時代から衰退気味になったとき、ちょうどテレビ放送が始まり、「沖縄芝居」はテレビ番組として再生を果たすことになりました。

沖縄では、もともと沖縄芝居は大人気でした。戦後の沖縄芝居は、捕虜収容所から始まっています。石川という場所に、沖縄戦で傷ついた人たちの多くが集められた収容所がありました。当時ハンナ少佐という沖縄に理解のある人がいて、「沖縄の復興は芸能から」と、戦前にお芝居をやっていたり踊りをやっていたりした、芸能に携わっていた人を意識的に石川に集め、松・竹・梅と劇団を三つ作らせたのです。今でいえば、公務員。アメリカ軍が給料をあげて慰問団を作り、トラックと機材を用意して、沖縄各地の収容所に巡回し上演していたといいます。その後、沖縄芝居の劇団は大人気となっていくのですが、沖縄に映画館ができはじめると、だんだん勢いがなくなっていきました。そんな時期に沖縄テレビがスタートし、ソフト不足の解決策として若干苦し紛れ気味に、沖縄芝居を生中継し始めたら、これが当時びっくりするくらいの視聴率をとったらしいのです。という調査かわかりませが、視聴率80%近かったといいます。本当に町から人が消えたというような状況が生まれたと聞きました。その放送が水曜の夜でしたので、長い間『水曜郷土劇場』として水曜の夜は沖縄芝居というイメージがずいぶん沖縄の中では定着していました。

しかし、最近では視聴率も難しく、スポンサー面でも厳しくなっていて、視聴している方々もどんどん高齢になっていますから、なかなか僕らも思うようにならないのですが、それでも沖縄テレビの歴史そのものですから、制作現場としては「これは沖縄テレビの魂でしょ」と、月に1本の放送を守り、舞台中継を継続させてもらっているのです。

『郷土劇場』は今でも人気の劇団があり、収録会場には観客がいっぱい入ったりはしますが、ほとんどが、おばあちゃん、おじいちゃんと付添の人たちです。『郷土劇場』にしても、沖縄の劇団にしても、今が転換期、ぎりぎり崖っぷちのようなところに立っていて、この大切な沖縄文化をどう次に伝えるのかというのが、僕らテレビ局としても一つ大きい課題となっています。

そこで、月にもう一本、同じ枠で、自分たちで新しいものを作ろうと、30代、40代の芸人と一緒に「新しい郷土劇場」を制作しています。よしもとさんの花月劇場の沖縄版のような番組を、公開録画で放送しています。

それから、3年前から、沖縄の言葉があまりわからない人たちでも、普段使っている沖縄のイントネーションとニュアンスが駆使されるバラエティー『ゆがふうふう』という番組も作っています。

この『ゆがふうふう』という番組は、コンセプトが「ウチナーグチを未来に継承するバラエティ番組」ということで、沖縄の言葉でコントや、トークも意識的に沖縄の言い回しなどを入れて、さらにスーパーで言葉の説明をテンポよく入れたりするようなタイプの番組です。沖縄の言葉が、もっと耳から入ってくるような日常を作り、何とかそこから沖縄の言葉に興味を持ってもらおうと、あの手この手でバラエティを制作しています。

——それは、若い世代の言葉が変わってきたという背景があるのでしょうか。

山里 若い世代というよりも、おそらく僕ら40代後半から50代前半の世代が、本土復帰前後の小学生で、学校現場で沖縄の言葉は使ってはだめだと言われた世代なのです。

「復帰」を体験した僕らの体験談をそのまま「ゆがふうふう」の中でコントにもしています。それが「方言札1972」という教室コント。…帰りのホームルームで「先生」って女の子が告げ口します。「今日、山里君が私にフラー（ウチナーグチで『バカ』）と言いました」。先生はいいます。「そうなの山里君。だめじゃないの、方言使っちゃ！明日からなんて言ったらいいんですか。」「わかりました。明日からはフラーと言わずに、ばかと言います」…復帰までの半年、1年というのは、沖縄の言葉を使ったら怒られるという世界がものすごくあり、「ウチナーグチ空白世代」が生まれ、言葉の溝ができました。

それはテレビの果たした役割もすごく大きいと思います。学校では道德の時間にNHKの子どもたちが出てくるドラマ仕立ての、「♪口笛吹いて、空き地へ行った」という、「♪みんな仲間だ、仲良しなんだ」のようなドラマが、授業で毎回見せられたりしました。テレビの影響で、僕らの世代は標準語がちゃんとしゃべれるようになっていて、逆に、沖縄の言葉はどんどん語学力としては低下していく状態になっています。

それが、平成元年くらいから、「沖縄の言葉も文化も面白いよねっ!」、という沖縄の再発見に皆の目が行きだしたのです。

沖縄テレビでいうと、平成2年から『ウチナー待夢（タイム）』という情報バラエティ番組が始まりました。これは沖縄文化の特集がメインで、そのテーマにまつわるコントを、「笑築過激団」という当時一世を風靡していた沖縄のお笑い劇団がしていました。あるいは、今、パーシャクラブというバンドで、歌い手として全国的にも人気がある新良幸人が新世代の島唄の歌い手といってそこで歌を披露したりするコーナーも放送しました。それ以降、今放送している『ゆがふうふう』に至るまで、沖縄テレビとしては、「沖縄が面白い!」というメッセージを若者に向けて発信するような番組を作り続けてきているのです。

OTVは、ローカルとしては自社制作が多い方だと思います。ゴールデンに自社制作番組を編成してもいます。毎週土曜日の夕方6時には『ひーぷー☆ホップ』という、おそらく全国探しても珍しいタイプの生番組も作っています。ラジオのようなテレビ番組という合言葉で、視聴者から来るメールをラジオのように読んだり、取材にはディレクターやタレントが行っても、あえて写真撮って紙芝居でやるような、極力動画を使わないイメージでやっています。低予算ながら人気番組で、視聴率15%とか16%とか取っています。

沖縄テレビが作るムーブメント

——例えば、安室奈美恵やSPEEDが東京に進出し、その後『ちゅらさん』などが放送され、本土のほうから沖縄を掘り取っていくメディアの沖縄ブームがありますが、そういうブームとは一線を画すということでしょうか。

山里 逆に、相乗効果と言った方がよいと思います。僕らが「沖縄っていいよね」と沖縄で番組を作っていた時に、例えば宮沢和史さんが三線を持って「島唄」でブレイク。当時、大人気だったTHE BOOMがスタイリッシュに沖縄の三線を持って歌ったことで、逆に沖縄の方で「すごーい、

やっぱり間違っていないじゃん」という感覚がありました。

その後に SPEED や安室奈美恵などアクターズスクール全盛が来て、ますます加速していきました。安室奈美恵が、東京のファッションの中心になり、渋谷の女の子たちが沖縄の子のファッションを真似しているということに対して、決定的に沖縄の人間は自信を持ったのだと思います。自分たちは「好きにやっていいんだ！」と。

僕は90年代後半に、沖縄アクターズスクールと一緒に番組を作っていました。『BOOM BOOM』という、沖縄アクターズスクールの子どもたちの厳しいレッスンをドキュメント風に追いかけて、その結果をスタジオで歌って踊るという、今でいう「リアリティ系」の番組です。スタート当時は、安室奈美恵と MAX (SUPER MONKEYS) が人気出始めの頃くらいで、SPEEDをはじめ、それに続く子どもたちは皆この番組に出演していたのです。DA PUMP もいたし、山田優とか、三浦大知、黒木メイサもここにいました。

この時代としては画期的でしたが、沖縄の若いタレントを追ったドキュメント番組は、サンテレビや TVK、都市部の周辺にあるテレビ局 14 局くらいが番販で買って放送していました。

沖縄という場所は、沖縄芝居、歌、民謡、お笑い、様々なジャンルで、「自己表現する人」がとにかくたくさん生まれてきます。沖縄で活動している芸能人をゲストに1年間、52回分のローカル番組がしっかり制作できる状況です。そういう意味では、日本の他の地方局と比べると幸せな環境だと思っています。

——今90年代以降のお話をお聞きしましたが、少し戻って BS や CS などの多チャンネル化が80年代に入ってきてますが、その際に経営の問題なども含めなんらかの影響はあったのでしょうか。

山里 僕らはずっと独自路線といいますか、あまり流行り廃りではなくやってきたというのもあるし、沖縄に特化するしか作りようがないと言った方がよいかもかもしれません。沖縄にこだわった番組作りをずっとやってきているので、多チャンネル化に対して、特に戦略があったり、大きな影響があったりしたわけでもないと思います。

沖縄という土地そのものが、エリアとして人気があるし、「沖縄で作ったものです」と言えば、コンテンツとしてはそれだけすごくエネルギーがあるはずだと思っています。逆に「多チャンネル化」はチャンスではないかと、変な根拠のない自信もあって、媚びずに沖縄にこだわって作ればいいのではないかというところはずっとやってきています。

例えば、『ゆがふうふう』というウチナーグチをテーマにしたバラエティー番組は、「スカパー！」や「ひかり TV」などのチャンネルで視聴できる「ホームドラマチャンネル」の「インターローカルアワー」というワクで放送されています。「インターローカルアワー」は、もともと九州各地の人気ローカル番組などを放送していた専門チャンネル。『ゆがふうふう』のほかにも、沖縄テレビ制作の番組としては、『郷土劇場』、『Oh! 笑いけんさんぴん』などは日本中で観ることが可能なのです。

当初は、僕らは全国で観られているということをあまり意識せず、沖縄の視聴者だけを想定して、ウチナーグチに関心をもってもらうために字幕を入れ始めていたのですが、沖縄だけでなく日本中から応援のメールが来るようになりました。先日、東京で企画された沖縄の PR イベントが代々木公園であって、OTV から「ゆがふうふう」のメンバーが参加してちょっとしたミニショーをやりました。そのときに、「東京へ行きます」と、Facebook やメールなどで情報をばら

まいていたら、3、40人東京の視聴者がこのステージをちゃんと待っていて、コントのキャラクターのうちとか作ってきている方もいるほど、熱烈な応援をいただきました。

——内地に行っている沖縄出身の人が集まったのでしょうか。

山里 沖縄出身の人もいましたが、沖縄出身者ではない沖縄ファンの方がほとんどでした。ひと月遅れでのインターロカルアワーでの放送を、「毎回楽しみにしています」という方々が、じわじわ増えています。『ゆがふうふう』に関しては、ちょっと全国ネットのつもりで説明文を書き直すことなどをやり始めています。テレビに限らずラジオの世界もそうだと思うのですが、今はもうエリア関係なくアプリで日本中のFMの番組がチョイスできる時代になってきましたから。

——今までのお話では、沖縄の言葉がひとつのキーワードだと思いますが、キー局の番組で沖縄出身のタレントがたまに「沖縄の方言」という表現をすると違和感を覚えることがあります。そのことを周りの学生と話しても反応が悪く、違和感のある／なしから議論を始めたりしますが、メディアの言葉が歴史性や政治性をもっていることについて本土ではあまり顕在化していないということの意味しています。

山里 そのタレントは、おそらく面倒くさいから「方言」と言うのだと思うのです。ウチナーグチ、沖縄の言葉について、いわゆる方言という日本の一地方の言葉ではなくて、沖縄独自の言語があるのですよと説明しないといけないから、沖縄の方言と言うほうがテレビ的には楽ですから、そうになってしまうのだと思います。しかし、沖縄テレビでは、いま「方言」という表現はなるべく避けるようにしています。いま沖縄の中でも、「沖縄の言語」は、「ユネスコも認めた独立した言葉」という認識は広がってきていて、「琉球諸語」と表現する人たちもずいぶん出てきています。テレビで「沖縄の方言」と言ってしまうと、クレームの電話が掛かってきたりするような状況になっています。

逆に、中途半端な知識で「ウチナーグチ」をテレビで使うと、「そんな言い方はしない」、「それはちょっとイントネーションが間違っている」といった電話もあり、そういう時はあらためて、沖縄の人々は「ウチナーグチ」を愛しているのだなということを実感します。

「ウチナーグチ数え歌」という「ゆがふうふう」のテーマソングを作ったときは、視聴者からの指摘でレコーディングし直すことまで起こりました。『ゆがふうふう』のMCがアイモコという夫婦の音楽ユニットで、彼らに曲を発注して相談しながら作った歌が「ウチナーグチ数え歌」です。「♪てーち、てーだが、太陽が、お空に一つ」、「♪たーち、ターンム（田芋）二つ取れました」という感じで、「てーち、たーち、みーち…」という、沖縄の言葉で1、から10まで数えられるようにしようというコンセプトの歌を作って番組のテーマソングとして発表したのです。この歌をレコーディングして放送したら、すぐその日に電話がかかってきました。10を厳密に言うと「とうー」と発音するのですが、「とお」のほうが語呂もよく歌詞作りやすかったので「とおで、とうとう、いしがんとおー（石巖當）」と放送したら、「間違ってる。“とうー”だ」という電話がたくさん掛かってきました。そこで、すぐレコーディングし直し、3週目からはちゃんと「とうー」で放送し直しました。

しかも、その歌はCDがばか売れして、いまでは沖縄中の幼稚園や保育園のお遊戯会とかで振り付けを楽しみながら、子供たちが歌っています。そういう意味ではすごい成果があり、この番組始まる前と後では、1から10まで沖縄の言葉で数えられる子どもたちは圧倒的に多くなったと思います。僕らもちょっと自信深めて、今、第二弾を挨拶の歌を作ろうとしているところです。

—お話を聞いていると、単に番組を作るのではなく、メディアでムーブメントを作っているイメージですね。

山里 そうですね。いろいろなことを表現したくてたまらない人が沖縄にたくさんいるので、僕らもその一員だと思っていると言ったらよいでしょうか。単に何か紹介するだけではなくて、僕らもやはりクリエイトしながら沖縄に関わっていきたいと考えています。今は、沖縄の言葉を、何とか復興ではないですが「ウチナーグチ面白いね」というムーブメントを一生懸命作ろうとしています。

地デジ化の影響

—そうすると、地デジになった場合にも、逆にそれうまく使えないかという発想なのでしょうか。

山里 そうですね。地デジで何変わったかという、あまり何も変わっていない気がします。双方向といいながら、リモコンに付いている四つのボタンを使うための設備投資が必要で、たぶん日本中のローカル局であるボタンが使える局はそうはないと思います。

毎週土曜日の夕方6時から生放送している『ひーぷー☆ホップ』という番組は、将来に備えて、いつかこの地デジ双方向に対応していくための準備番組だと思っています。「ラジオみたいなテレビ番組」というコンセプトで制作しているのですが、視聴者とキャッチボールするための番組を作ろうとしています。今は、この地デジのリモコンにある四つのボタンは沖縄ローカルでは全然活用できないので、いちばん身近で使えるツールとして、携帯のメールを使って視聴者とやり取りをしているところです。つい最近、フジテレビの技術部門の番組のための「あんたが大賞」というコンテストで、携帯メールから番組のMCへ連動していくシステムが評価され、特別賞をいただきました。

スマホとテレビとの連動については、まだ可能性を探っていく必要があり、スマホのアプリをダウンロードしてからテレビを見る実験があったりしますが、私たちもアプリを放送で活用できないかと、いま、専門業者といろいろ実験を始めているところです。このスマホの可能性がどこに進むのかはわかりませんが、ただスマホだけで完結してしまうと、おじいちゃん、おばあちゃんは置いてきぼりになってしまうので、どういうやり方がテレビを見ている人たちといちばんつながれるのかなということを、いろいろ考えています。

—さきほどCSやひかりTVのことがありましたが、スマホ以外にもインターネットとの関わりはどのように考えていますか。

山里 今、Facebookの取り組みを一生懸命やっています。Facebook上で動画を発信する実験もいま始めています。公式にはYouTubeはまだですが、『ひーぷー☆ホップ』にしても『ゆがふうふう』にしてもすでに非公式に、あちこちからYouTubeにはアップされています。例えば、ウチナーグチ数え歌の振り付けもかなりいろいろな方がアップしてくれていて、それなりに何万再生とかなって、見られていたりしています。

—視聴者が自分で撮影したものをYouTubeにアップしているタイプですね。

山里 はい。番組でもYouTubeにアップされている「ウチナーグチ数え歌」で子どもが踊っている画像を、たどって連絡をして、承諾もらって番組で使ったりもしています。こういうことは、全然無視はできないし、逆に、いい形で連動していったほうがテレビには有益なのだろうと思います。

ただ、今、視聴率はリアルタイム視聴しか数字に出ないので、それだけを指標にされると制作者としてはかなり辛い状況が生まれています。特に『ゆがふうふう』のような番組は、「言葉を学ぶ」イメージで録画して何回も見るという視聴習慣の視聴者も多くいて、実際にはもっと多くの人に楽しんでもらっていると思っています。現在の日本のテレビの仕組みの中ではなかなか難しいのかもしれないですが、もっと違う指標があってほしいなと思います。

沖縄発のドキュメンタリーへの想い

——ドキュメンタリーについてはいかがでしょうか。山里さんもドキュメンタリーで賞をとっていらっしゃいますが。

山里 沖縄テレビでは、ドキュメンタリーはとても大切なジャンルと認識しています。いろいろ変遷はあるものの、「ドキュメント九州」というFNS系列の九州8局で何とかドキュメントの枠を続けようと、20数年間頑張ってきてやってくる番組もあります。テレビ西日本が幹事局で、20年以上前は、『We Love 九州』という枠で、当時はNTTの提供で日曜日の午前中に1時間ワクで、毎週皆頑張ってきて作っていた時代がありました。その後、だんだん状況が変わり、スポンサーがなかなか提供につけられないよう中、それでも踏ん張って30分のドキュメンタリー枠を協力して作っています。

九州は比較的ドキュメンタリーに強くて、日本のいろいろなコンテストでも賞をとったりする番組がどんどん生まれています。この「ドキュメント九州」に参加している九州各局では、1回このワクで足掛かりを作って、その後は自前でどうにか制作費を捻出して追加取材をし、1時間ドキュメントに仕上げ特番化するというのを繰り返しています。

全国のFNS系列ですと、ドキュメンタリーの制作能力を伸ばしていくねらいで、コンテスト形式の「FNSドキュメンタリー大賞」というワクがあります。系列各局、毎年代表作品の1時間ドキュメントを制作してを、それをフジテレビが形上全国ネットの深夜に流れているドキュメント枠です。優秀作品は表彰され賞金も出ます。

ほかにも民教協で、『日本！食紀行』というタイトルで全国の民教協加盟局が持ち回りで作っているドキュメント枠があり、ここも年に1本くらい参加させてもらっています。

ドキュメンタリーについては、編成とのかねあいから視聴率がどうしても優先されて時間枠が設定されてしまう側面があります。しかし、ローカル局としては、テレビ局としてのプライドや全国に名をとどろかす方法として一番可能性が高いのは、ドキュメンタリーで大きな賞をとることです。

おそらく日本中のローカル局はそうだと思うのですが、いい素材を見つけて、いいドキュメンタリーを作り、コンスタントに全国規模の賞を獲得して、「OTV頑張ってるね」と世間に認知させるというのがローカルテレビ局のスタイルでしょうね。僕もずいぶん沖縄戦のことや、沖縄ならではのネタでドキュメンタリーを作らせてもらってきました。

OTVの報道も、ローカル局の報道部としてこんなに忙しいテレビ局があるのかというくらい忙しいですよ。北朝鮮のミサイルや尖閣など、普通に基地問題だけでも大変なのに、この数年、ずっと振り回されているのです。しかし、沖縄ローカルでの大問題が、全国ネットでは大問題にならないので、そういうジレンマをすごく抱えながらドキュメンタリーも日々の報道も制作しています。「どうやって沖縄問題を全国に届けるか」という意味ではなかなか難しい現状があり、日々闘って

います。

—— 6月23日の慰霊の日は、沖縄ではNHKローカルも含め、特番を組んでいます。全国ネットで報道されることは非常に少ないですね。以前、沖縄の慰霊の日の式典の番組を全国ネットのニュースと比較して観たことがあるのですが、アナウンサーの原稿だけでなく、カメラワークも含め、沖縄という視点が全面に出ていることを実感したことがあります。

山里 そうですね。たぶん、いろいろな批判もあるでしょうけど、沖縄にとってのニュートラルって、そもそも水平の軸が傾いているので、他の地方から見ると「偏っている」と思われるくらいではないと、沖縄ではバランス取れている感じがしないですね。

僕も、ちょうど報道に所属していた頃に、沖縄国際大に米軍のヘリコプターが墜落炎上した事故が起きました。2004年の8月13日のことです。沖縄は当然大騒ぎだったのですが、生中継でトップニュースだろうと思って沖縄では全局が構えていたら、キー局からは「中継いらぬから撤収」と言われ愕然としました。「これが全国トップニュースじゃないの？」とぶつぶつ言いながら片づけ作業する僕らの目に飛び込んできたその日の全国のトップニュースは、なんと「ナベツネ辞任！」でした。ヘリ墜落のニュースは、負傷者ありませんでしたというだけのフラッシュニュースワクの40秒。あまりのギャップ、沖縄と本土との温度差に呆れました。

そんなことが繰り返されてくると、僕は、どんなに大事なことも見てもらえないのであれば放送としては全く成立しないなという認識が強くなって、だからこそ手を替え、品を替えではありませんが、何とか興味をもって最後まで見てもらうような工夫をしてくれています。沖縄戦を扱っても、大上段に何か言うのではなくて、どうにか飽きさせないように、全国ネットにしる、沖縄向けにしる、テレビ番組として面白くなるような工夫を一生懸命しながら作っています。

——あのヘリの事件の時は、知り合いから携帯で撮った墜落の写メが送られてきたことを今でも覚えています。携帯の写真がネットで回ってくるというのが、僕は最初の経験でした。

山里 そうですね、確かに。東京で暮らしているウチナンチュも、沖縄の知り合いからは沖縄はすごいことになっているとメールやら、写真が届くのに、東京でどんなにチャンネル回してもニュースで報道されていない。「本当かーっ！」という経験をしたウチナンチュも多かったと思います。

沖縄のお笑い芸人の小波津正光（まーちゃん）という、東京へ進出して頑張っていた男がいます。彼は、沖国大にヘリが落ちた日に東京にいたのですが、まさに友達からジャンジャン連絡が来るのに、東京のどのチャンネルをつけても何も情報が入ってこない。そのギャップと苛立ちから、沖縄にその後帰ってきて、沖縄で「お笑い米軍基地」という、沖縄の基地問題を全部笑いにしとしまえというパロディの舞台を始めました。当初は「基地問題をコントにして、怒られないか…」と恐る恐るやったらしいのですが、今やすごい人気舞台で、市民会館レベルの1000人とか2000人入る劇場が満杯になっています。

沖縄の人は、彼らの「お笑い米軍基地」を見て大笑いするんですよ。タブーだから。普段、皆、眉間にしわ寄せて話しているようなことをコントにされるから、本当にヒーヒー言って笑ってるんです。ただ、ネタの半分くらいは過激すぎてテレビでは流せません。

——地デジに関してあらためてお伺いしたいのですが、社史の資料を見ると、経常利益が下がっている年がありますが、これは地デジの設備投資の影響でしょうか。

山里 そうですね。はい、地デジの設備投資です。経済情勢で売り上げや経常利益は多少浮き沈みはあると思うのですが、地デジの設備投資は、特に沖縄のような環境では離島の問題もありますので、大きく影響してきます。どこまで国が補助してくれるのかというところはぜひぶんせめぎ合っていたと思います。

地デジの普及率は、大東島でも開局しましたから、現在は離島も含めてほぼ100%にはなっています。実は、沖縄地区の端っこに位置する大東島は、地デジ開局するまでは、沖縄県でありながら沖縄の放送を見ることができなかったのです。地上波は届かず東京寄りのBSを視聴していました。だから、沖縄でありながら沖縄のローカル放送をずっと見ていなくて、沖縄本島の知り合いから『郷土劇場』などのビデオを送ってもらって見ていたという人たちが多くいました。地デジ開局の時にようやく海底ケーブルが開通して、その記念式典のための事前取材で、大東島の状況を改めて僕らは知ることができました。

開局の日に生中継をしたのですが、本当に皆さんが、「ようやくこれで沖縄県民になれる」と、「大東島の皆さん、初めましてー」って、そういう番組になりました。大東島ではBSを見ていましたから、台風情報は大東島の人たちにとってのピーク時は、一切放送では触れられてなくて、台風が通り過ぎてから、頻繁に細かく情報が入ってくるような状況だったといいます。だから、地デジになってようやく台風情報もリアルな時間に沖縄の情報を知る環境になりました。

報道とスクープ映像

——先ほど、報道に関して全国ネットと比較すれば水平線は傾いているのが、沖縄の普通だというお話がありました。地域とのかかわりに関して、基地の問題も含めてどのようなスタンスで追っているのかということ、最後にあらためてお聞きしたいと思います。

山里 沖縄テレビのスタンスはたぶん沖縄のメディア全体から見ると、いわゆる「ニュートラル」寄りというか、なるべくいろいろな情報を分け隔てなくなるべく見ていこうという姿勢が強いと思います。

基地の反対運動をされている方々に、溶け込んでというかそちら側にカメラごと入り込んでいて、強いメッセージを発信するという姿勢も大事だと思うのです。しかし、ウチの社風でもあると思うのですが、なるべく客観的に表現していくことを基本にしています。僕が作ってきた番組もそうだし、過去、沖縄テレビが作ってきたドキュメンタリーやニュースでも、いろいろな考え方をバランス良く表現するスタンスに立ってやっていこうとしていると思います。それでもやはり先ほど言ったような、中央とのあまりにも大きいギャップをなるべく埋めていきたい、事あるごとに発信はしていきたいと思ってはいます。

廃藩置県で日本になり、戦争に負けてアメリカ軍の占領統治下時代があって、また日本に復帰する。それ以前には琉球王朝という時代がある。そういう変遷があって、今の沖縄が成立しているバランスがあると思うのです。ウチナーンチュ（沖縄人）としてのアイデンティティーをベースに、バランスを保ちながら大事なことはちゃんと伝えようとする社風が、沖縄テレビにはあると思います。

沖縄で最初のテレビ局である OTV には、沖縄の歴史を映してきた様々な映像があります。スクープ映像もいろいろあるのですが、その中に「初のスクープ映像」である、開局前、1959年6

月の映像が残っています。1959年に、開局準備の技術研修で、報道のカメラマンが練習している時期に、石川にある宮森小学校に米軍機が墜落したのです。子供たちを含む多数の死傷者がでました。その墜落直後の現場を撮影した唯一の動画がOTVにあります。研修中の若き宮城カメラマンが、現場に駆けつけ撮りました。あとで話を聞いたら、沖国大にヘリが落ちたのとほぼ同じような状況だったと感じました。

米兵が来て封鎖したり、燃え残っている機体を持ち出していくような作業を撮影してた宮城カメラマンは、米兵に「お前、それ、フィルム出せ」って言われて没収されそうになったらしいのです。「OK、OK、わかった」と機転を利かせて、カメラから出す振りをしてまだ撮影していないフィルムを渡し、撮影していたフィルムはカメラの中に残し帰ってきた。その後、放送したら圧力かかったらしいんですけど…。「復帰運動」「毒ガス移送」「コザ騒動」「日本復帰」…開局以来、沖縄の現実を記録してきたたくさんの映像と、先輩たちから受け継いできた「テレビマンとしてのDNA」が沖縄テレビの貴重な財産です。

——本日は長いお時間をいただき、ありがとうございました。